

◆本の紹介◆

「発生と進化

三木成夫記念シンポジウム記録集成」

和氣健二郎, 養老孟司, 後藤仁敏, 坂井建雄,  
布施英利 編著

2020年1月20日発行, A5判 397頁

3,600円(税別), 哲学堂出版.

ISBN 978-4-906979-04-2



本書は、1989年から2010年にわたり19回を重ねた三木成夫記念シンポジウムの記録の集大成です。三木成夫は解剖学者で、氏の個体発生や生体のリズムと系統発生（進化）の関係についての論考は数多くの後進に多大な影響を与え、それは現在も様々に引き継がれています。1987年に61歳で急逝されてからも、その後約20年にわたり記念シンポジウムが行われてきたことが、それを証明しています。化石研究会でも第38回例会（1971、東京教育大）にて「脊椎動物の比較発生に関する一考察」という演題で講演されています。

紹介者自身も「胎児の世界」（三木成夫、1983、中公新書691）と出会ったとき強い印象を受けたのを覚えています。当時はある魚類の個体発生過程で歯と顎の形態が大きく変化することを調べていました。その現象はこの魚類の進化の反映とするとうまく説明できるのです。しかしそのころ、ヘッケルの「個体発生は系統発生の短い反復である」という「反復説」は、完全否定とまではいかないまでも多くの批判があり、どこまで正しいのかわからず、頭の中がもやもやした状態でした。三木成夫は「反復するのは原形すなわち“おもかげ”である」とし、祖先が経てきた進化史上でのイベントの数々を初期（胎児）の個体発生に見出

し、明確に示していました。やはりこれだ、と思ったものです。そこからは、詳細な個体発生の観察が基本であり、その観察事実の背後には進化過程があることが学び取られ、自身の研究にも大いに役立ちました。現在では「反復説」も若干見直され、進化発生生物学（Evo-Devo）などとして進展しています。一方、くだんの魚類の進化過程の方は化石の証拠がまだ不十分で、確認には至っていませんが、

三木成夫がこれだけ多くの、それも広い分野の人々に影響を与えたのはなぜでしょう。氏の論は膨大な観察（事実）と論理に基づいているのですが、それを難解な論文だけではなく、わかりやすい解説と美しいシエマで表しているからではないでしょうか。それは絵画や彫刻などの芸術表現に似て、人々の感性にまですすめ、納得させる力があるのだらうと思います。

主な目次は次の通り。

- I 三木成夫の「生命の形態学」
  - いのちのかたちのコスモロジー 吉増克實
  - かたち・リズム・おもかげ 高橋義人
  - らせんの形象 布施英利
  - 三木学の解剖 坂井建雄
- II 三木成夫について
  - 対談 三木成夫の世界 中村雄二郎・養老孟司
  - 他 エッセイ 18編
- III 三木成夫の生涯と業績
  - 「生命形態の自然誌 I」序文 浦 良治
  - 同 あとがき 平光厲司
  - 三木成夫の生涯と業績 後藤仁敏
  - 年譜・主要著作目録
- IV シンポジウム要旨録
  - 第4回から第19回までの要旨
  - 資料 三木成夫論文
  - 「原形」に関する試論
  - 植物神経の Phytogenie

大部分はすでに発表されたものの再収録ですが、1冊にまとまって読めるので三木成夫の世界を知るうえで大変役に立ちます。個体発生と生物進化に興味を持たれている方にはぜひ一読をお勧めする次第です。

(笹川一郎)